

## 入院中の遷延性意識障害患者に対する訪問歯科診療の臨床統計

安田 順一<sup>1</sup>、福田 幸泰<sup>2</sup>、玄 景華<sup>1</sup>、豊島 義哉<sup>3</sup>、篠田 淳<sup>3</sup><sup>1</sup>朝日大学 歯学部 口腔病態医療学講座 障害者歯科学分野、<sup>2</sup>ふくた歯科クリニック、<sup>3</sup>木沢記念病院 中部療護センター

独立行政法人自動車事故対策機構中部療護センター(以下療護センター)に入院中の患者の歯科的疾患に対して、療護センターから近隣歯科医院に訪問歯科診療が依頼されて対応してきた。これまで遷延性意識障害患者に対する訪問歯科診療の報告はほとんどない。今回、療護センターで入院加療していた遷延性意識障害患者に対して訪問歯科診療を行った患者記録をもとに臨床統計的分析を行ったので報告する。対象は69名(男性52名、女性17名)で、平均年齢34.7歳(12-76歳)であった。調査期間は、2002年から2011年までの10年間である。歯科処置内容は、充填修復42症例(148歯)、鑄造修復11症例(25歯)、根管処置12症例(15歯)、抜歯8症例(36歯)、義歯製作5症例(9床)、バイトプレート製作3症例、インプラント除去1症例であった。歯周初期治療は67症例に行った。多数歯う蝕を伴う2症例は、朝日大学附属病院に搬送し全身麻酔下で歯科治療を行なった。開口保持が困難な症例では、静脈内鎮静法を主治医に依頼して歯科治療を行った。患者は、遷延性意識障害のため意思の疎通は困難であり、歯科診療所との関わりが少なく、歯科疾患は見逃されていることも多いと考える。入院初期に歯科医師が関与することで口腔機能や嚥下機能の改善に寄与できた可能性がある。今後は、入院患者全員の口腔状態を把握することで、歯科疾患の早期発見治療に努めたい。口腔環境の改善のため、地域におけるネットワークの構築が必要である。